

## 通いたくなる作付けや収穫の工夫

参加するたびに、通う楽しみが増していく。それは、地域農業の魅力がいっぱいで、生産者のこだわりも伝わってくるような体験ファームです。

### 若い家族の野菜生活が充実



札幌市の市民体験農業を考える会の体験圃場は、親子参加の市民農園型菜園です。「収穫したてのピーマンをタテに切ったら食べられた」「ズッキーニ料理のレパートリーが広がった」など、若い家族にとって、野菜生活づくりと食育に欠かせない場になり、2年、4年と連続参加する家族もいるほどです。

北海道畑作の恵みをめいっぱい享受できるよう、事務局、指導生産者そして農業ボランティアの人びとが、年々工夫をこらしています。

### 個人圃場は、北海道輪作の恵みをたっぷり

個人管理圃場は1家族1区画50㎡。20区画すべて、トウモロコシ・ジャガイモ・大豆(枝豆)の3品目を、北海道型の輪作で栽培します。トウモロコシは早生でやわらかいバイカラーの「ゆめのコーン」、中生で黄色の「カクテル600」、晩生の「キャンベラ90」。ジャガイモは主要品種「男爵」と、やわらかい「きたあかり」、煮崩れしない「メークイン」、赤い「レッドアンデス」。枝豆は黄大豆の「サ



個人管理圃場の枝豆

ッポロミドリ」、茶豆の「味一番」、黒豆の「光黒大豆」。さまざまな味と色あいの品種が、長い期間楽しめるのが大きな魅力です。

### 共同圃場は、多彩な収穫がつづく楽しみ

共同管理圃場には、個人収穫と共同一斉収穫の野菜があります。

**個人名札野菜** ナス・ピーマン・トマト・ミニトマトは共同畝に個人株を2株植えて名札をさし、自由に収穫します。

**自由収穫野菜** キュウリ・ズッキーニ・バジル・ナンバン・加工用トマト・ダイコン・カブ・ニンジン・キャベツ・ハクサイなどはいつでも自由に収穫できます。

**一斉収穫野菜** カボチャ・タマネギ・落花生・サツマイモ・漬物用ダイコンはみんな一度に収穫して、料理教室や保存・加工の楽しみになります(カード1-3)。

作付けのねらいのひとつは早くから収穫できること。6月にはラディッシュがとれ、7月にズッキーニ・ピーマン・キュウリ・ミニトマトなどが続き、8月のトウモロコシや枝豆へと、畑に通う楽しみが増えていきます。

お母さんたちにうれしいのは、店ではあまり見られない野菜との出会い。例えば、ズッキーニはふつうの長型のほか、丸型・黄色のものなど多彩です。加工用トマトが初めての人も多く、加工実習でジュースやホールトマトの缶詰めづくりの技を覚えて、食卓の自給が充実します。



共同管理圃場で一斉収穫するタマネギ



丸型のズッキーニ

### 幼い子どもに、お母さんにうれしい畑とは

#### 幼児の畑デビューには、多品目野菜ガーデン



NPO法人しずおか環境教育研究会(エコエデュ)は、市民農園の一角で教育ファームを開設。参加者は20~30代の親と幼児。畑は長さ10mくらいのうねが15本ほどで、キュウリ・トマト・ピーマン・ナス・ジャガイモ・ニンジン・サラダ菜・サニーレタスなどが少しずつ育ち、かわいくにぎやか。この少量多品目が、幼い子の畑デビューにはピッタリです。

畑ではまず夏野菜をとって食べる経験。出発前にスタッフから、見る・嗅ぐ・さわる・味わう・聴くの五感を働かせることをやさしく教わってきた(カード3-1)ため、ひとりの子はトマトをまず指でさわり、次に匂いを嗅ぎ、それからゆっくり口に運んで、かじった瞬間にニコッ、「おいし〜」。次のキュウリでは、トゲトゲが気になるのか、すぐにはつかめない。でも一口食べるとやっぱりニコッ。

それから、サラダ菜を摘み、ジャガイモ・ニンジン掘り……と一つひとつ異なる摘み方や掘り方を体験します。

そしていよいよとりたての野菜を使って料理。ピーマンはゴマと絡めて炒め、ジャガイモとナスは味噌汁へ、あとはキュウリもニンジンも生でガブリ。いろいろな野菜を洗う、ちぎる、切る、すると、多彩な体の動きを働かせて、食事ができていく体験に、子どもたちは真剣です。

#### 自然な野菜で、食卓をもっと元気に美しく

愛知県の西村自然農園で、参加者たちは小さな畑を回ってうれしい発見また発見がづく収穫をして、料理を楽しみます(カード3-4、5-3)。

お母さんたちの関心のひとつが、農薬なしでも虫に食われていないこと。「このダイコン、本当に農薬なしですか?」「いのちあるものはみんな、虫を寄せ付けられない物質を出しているんです」「トマトの間にピーナツを植えてありますね。トマトに虫がつかない、病気がない、味が良くなるなどいいことがいっぱい。肥料を少なくして、コンパニオンプランツと雑草を生かして

つくれば、よその畑が日照りで枯れたときでも、霜が来るまで収穫できます」。

「ツルムラサキは、葉もいいけど、花が咲く先のところもおいしいです。食べてみてください」「花オクラは、サラダに使うととってもきれい。子どもさんとの料理も楽しくなります」。野菜とのつきあいがグリーンと広がる畑です。



料理を美しく 花オクラ

#### 個人畑と共同畑 メリットを生かして

「夏作と違って苗を植えるのでないから、こまめに来て草取りしないと雑草に負けてしまうよ」。新潟市教育ファーム推進協議会(カード1-1)の秋ダイコンとカブのタネまきで、指導生産者の山本秀樹さんは、何度も繰り返しました。つくるならやっぱりおいしい野菜を収穫してほしいという思いが伝わってきます。



共同で力を合わせて

夏野菜は、参加家族が自由に取り組めるようにと家族畑で実施しましたが、手入れによく来る家族と来ない家族の差がついてしまいました。

そこで、秋野菜は、3~4家族共同畑へと変更。お互いに「手入れしなければ迷惑がかかる」と気遣いあってくれればうれしい。さらに、一緒につくることで交流が進めばもっとうれしいと、事務局は期待しています。

共同畑のなかでも各家族エリアは大方決まっていて、それを確認しながら作業を進めますが、「休みの人のところもやっておいたほうがいいですか?」と声があがるなど、「隣組」的な共同畑の良さがじわりとあらわれてきました。

## 田畑の周りをドラマティック体験いっぱい

教育ファームの主な舞台は田んぼや畑。けれども、周りを少し見まわしてみれば、森や小川、生きものたち……そこは魅力的な体験素材の宝庫でもあります。それを生かさないのはもったいない！

### 魚釣りのために、まずは山へ

鳥根県津和野町のさぶみ牧童探検隊応援団では、農作業の合間に、みんなで魚釣りに行くことが大流行。といっても、いきなり川へ行くわけではありません。まずは学校裏の林から篠竹を伐り出して、竿をつくることからスタート。



名人の指導で仕掛けづくり

竿づくり初体験の子どもたちは、つるつるすべる篠竹に糸を結ぶだけで一苦労。そこで、釣り名人のおじさんたちの登場です。手順を丁寧に説明しながら仕掛けづくりを伝授。子どもたちは真剣な表情で、独特の糸の結び方を習います。

竿ができると次はエサ取りへ。「ミミズはどこにいるんだろう?」。あちこち探しまわり、堆肥の中や湿った落ち葉の下などに、ミミズがたくさんいることを発見します。「ミミズは有機物を分解して土を肥やす」という知識が、子どもに実感をともなって納得される瞬間です。

### 農業体験がふるさと体験に広がる

竿とエサの準備が整ったら、いよいよ魚釣りに出発。ポイントは、田んぼ近くの用水路。「こんなところに魚がいるの?」。半信半疑なお母さんたちの前で、見事、小魚を釣り上げ、ガッツポーズ！

道具やエサの調達、仕掛けをつくる技の習得、魚がいる場所の観察。魚釣りとい

う「遊び」のなかに、実はいろいろな「学び」の要素が含まれています。そして、経験を通し体で会得する学びは、まさに「生きる力」そのものです。

そもそも、農業とは地域の自然や人びとの暮らしとの密接な関係のなかで営まれてきたもの。少し視野を広げることで、子どもたちの農業体験は「ふるさと丸ごと体験」へと深まり、地域に生きる一員として子どもを育てることにもつながっていきます。



### 自慢できる思い出があってこそ、地域への愛着がわく

さぶみ牧童探検隊応援団では、地域の小学生を対象に、米や野菜の栽培、ウシの世話などの体験を行っています。活動日は、毎週月曜日の放課後と毎月第2土曜日。

「農作業の経験も大切だけれど、何より、子どもたちに思い出をつくってあげたい」と語るのは、指導農家の京村真光さん。社会に出たときに自慢できるような思い出があってこそ、ふるさとに対する愛着が生まれると考えています。

その言葉どおり、農作業の合間に周辺の山や川で、いろいろな遊びを考え出しては力いっぱい駆け回る子どもたち。楽しくて楽しくてしかたないという様子です。

少子高齢化が進む左鏡地区にあって、ふるさとを愛する次世代を育てたい……この活動には、京村さんはじめ、左鏡地区の人びとのそんな願いが込められています。



段差があれば、飛び降りて肝試し

### どろんこ遊びや動物たち…目を凝らせば、ドラマティック体験の素材は無数にある！

#### 田んぼだってアイデア次第でいろいろ



田んぼはイネを育てる大事な場所。だけど、田植え前の田んぼや休耕田は、どろんこ体験ができる、ほかにはない独特のステージです。

どろんこ相撲で盛り上がるのは、山梨県の北杜食育・地産地消推進協議会。それを糸口に、「相撲はもともと、豊作を願って、田んぼの神様に見ていただく大切な行事だったんだよ」と、参加者に日本の伝統文化を語りかけます。

徳島市のえんたのれんこん推進協議会では、作業前の田んぼで「田舟レース」を開催。昔、この地域で農具や苗などを乗せて移動するために使っていた田舟からヒントを得たものです。子どもたちは最初から大喜びですが、素足で泥になど入ったこともなく、最初はおそろおそろ足を入れていた女子大生たちも、いつの間にかレースに夢中で泥だらけ。れんこん栽培という泥の中の作業への抵抗も、だいぶ薄れた様子です。



#### 子どもたちのハートをがちりつかむ動物たち

ヤギやロバなどの草食動物は、田畑での存在感バツグンです。

福井県鯖江市に園場がある、(社)ふくい・くらしの研究所の人気者はヤギさん親子。活動日には福井市から軽トラックに乗ってやってきて、田んぼのあぜの草を食べしてくれる、強力な農作業の助っ人です。そして、その子ヤギたちのかわいいこと！大人も子どもも夢中です。

でも、このヤギは、乳を搾ってチーズをつくるために飼われているもの。オスの子ヤギには、やがて肉となる運命が待っています。それを知った子どもたちから、思わず「かわいそう……」という声。「でも、そのための家畜だし……」。動物たちとのつきあいは、いのちについて考えるきっかけとなっていきます(カード4-9)。



#### 言葉だけでは伝えられない「いのちの循環」

動物が主役の体験なら、いのちの学びはさらに深くなります。

山口県上関町の祝島未来航海プロジェクト実行委員会では、生まれたばかりの子ブタを、子どもたちが世話をして、出荷まで育てています(カード4-9)。

島の耕作放棄地に放牧されたブタたちは、強い鼻の力で土を掘り起こし、草や根を食べます。そのブタのフンが肥やした土で、人間が野菜をつくり、いただきます。野菜の一部は、ブタにもお裾分け。そして最終的には、自分たちが大切に育ててきたブタたちも、お肉としていただきます。そんな「いのちの循環」と「感謝の気持ち」を、子どもたちに伝えたい。

子どもたちは、ブタとのつきあいを通していのちと深くふれ合い、「いのちをいただく」とはどういうことかを学びます。その学びは、言葉や頭だけの表面的な理解とは違い、子ども心にまで届く……未来航海プロジェクトのスタッフたちは、そんな手ごたえを感じています。



## 教育ファームを子どもの「生活の場」に

普段のお散歩や放課後の時間。教育ファームを子どもたちの日常生活に上手に組み込むと、畑や地域とのかかわりが密になり、学びはどんどん広く深くなっていきます。

### 保育所の外に出る開放感が体験のスパイス

山梨県の西桂町教育ファーム・西桂町保育所の年長さんたち。仲良く手をつないで、お散歩に出発です。目的地は、保育所から歩いて10分ほどの畑。月に数回、地域の農家の指導を受けながら、子どもたちはここで“お百姓さんになる”のです。



「ちゃんと引っぱってる？」「そっちこそ！」

畑仕事の多くは草取りですが、子どもたちは少しも嫌がりません。それどころか、畑がきれいになると、隣の空き地の草まで抜き始めるほどの熱中ぶり。

園の外に出るという開放感が子どもたちの「ワクワク」を刺激し、草取りさえ楽しくしてしまいます。

### “お百姓さんになる日”が毎日に！

近くに公園がないため、以前はほとんど保育所から出ることなく過ごしていた子どもたち。それが今では、お百姓さんになる日以外にも、「芽が出たかどうか見に行こう！」と、畑の様子を見るためにお散歩へ出ます。

「畑に行くと、いつもは砂遊びなどしない子がどろんこになって遊んだり、子どもの違う面が見えてきて驚かされます」と担任の先生。

また、年長さんたちが畑からとってきた野菜は、給食やおやつになったり、みんなで夕市を準備して送迎のお母さんたちに売ったり（カード2-5）。教育ファームを中心に、保育の幅はぐんと広がっています。



自分たちでつくったトウモロコシがおやつ

### 学校を出て、地域の人びととふれ合う、五感を広げる

滋賀県東近江市で教育ファームに取り組む農事組合法人万葉の郷ぬかつか。畑に通ってくるのは、県立八日市養護学校の生徒と先生たちです。ぬかつかの組合員と一緒に、毎年、サツマイモなどを栽培しています。

学校から畑まで歩いて30分。子どもたちの障害の種類や程度が違うため、なかなか足並みが揃わず大変ですが、ちょっとしたピクニック気分には表情はいきいき。

畑で出迎える組合員さんは、久しぶりに会う子どもたちに「〇〇ちゃん、大きくなったねえ」と声をかけます。温かい心が伝わるのか、子どもたちはすっかりリラックス。畑仕事をし、植物や虫などにふれ、土をこねまわし、夢中になって遊びます。

地域の人びとに見守られながら、畑でのびのびと五感を広げる。そんな、学校のなかではなかなかとれない貴重な時間を、子どもたちに心ゆくまで味わわせてあげたい……組合員や先生たちの思いが込められています。

みんなでサツマイモ掘り



### 放課後、宿泊体験、展開さまざま「教育ファーム」

#### 宿泊体験でスペシャルな体験を



初めてのおくどさん調理

吹きまくれ～!

時間的に余裕がある宿泊体験を取り入れると、いつもの活動ではなかなかできない、さらに踏み込んだ農や暮らしの体験に挑戦できます。

兵庫県篠山市の(社)ノオトは、夏休みの間に1泊2日の宿泊体験を行っています。

お昼ごはんのカレーに使う食材は、みんなで畑に出て収穫。調理は「おくどさん(京都地方の言葉でかまどのこと)」で。新聞と柴で火種をつくり、太い薪をくべ、火吹き竹で火をおこします。なかなかうまくいかず、消えかかる火種。「火が使えないことにはご飯は食べられないよ」というスタッフの声に、子どもたちは必死の形相で吹きまくります。そしてがんばること数分、ついに薪から火が! 「やったー」。

自分たちでつくった野菜を使い、自分たちで火をおこし、自分たちで調理した絶品カレー。ほおぼる子どもたちの顔は、充実感いっぱいです。

#### 放課後は引き受けます「学童ファーム」

放課後の時間を活用した活動なら、農作業体験は子どもたちの日常生活の一部として定着し、子どもたちの間には学年を超えたつながりができていきます。

長野県の小布施子ども教室運営委員会では、栗ガ丘小学校の生徒を対象とした放課後の「子ども教室」のひとつに「畑コース」を設

6年生のお姉さんと調理体験



置。1年生から6年生までの約50人が、自分たちの畑で、年間通して作物を育てています。

スタートして3年目頃から、上級生が下級生の面倒をよく見るようになってきました。今ではスタッフが上級生に少し指示を出すだけで、しっかり作業を進めてくれます。また、「草取りしなきゃ食べちゃだめだよ」と“いいとこ取り”をしないよう注意し合うなど、規律や自主性も生まれてきました。日々の活動を通して、子どもたちはグングンと力をつけています。

#### 年間通して地域まるごとの農・食にふれる

平成17年度から、文部科学省の子どもの居場所推進事業として「放課後子ども教室」を実施してきた宮崎県のNPO法人五ヶ瀬自然学校(カード5-5)。

鞍岡小学校の子どもたちが、放課後になると寺子屋風の教室に集まってきます。そこでまず宿題をし、それから1年生から6年生まで一緒になって遊び、さらに地域の生産者などの指導を受けながら、農作業に取り組んでいます。

週に2回、年間通しての活動なので、子どもたちは地域でできるほとんどすべての農作物にかかわることになります。季節にそって、約30種類の作物を育て、収穫し、加工・料理して食べる体験を積み重ねる。それらの活動は、全員が写真入りで「農業日記」に記録しています。

1年のめぐりとともに、地域の農・食の体験を繰り返す子どもたちは、学年があがるにつれて技が身につき、やがて下級生を教える立場になっていきます。異年齢の子どもたちが一緒に勉強し、一緒に働く「放課後生活空間」の良さです。



放課後に1年生から6年生まで集まってまずは宿題

# 目標を掲げ、意気込みを伝えて I ゴールに向けてスタートしよう

スケジュールどおりに体験をするだけでなく、初めから目標を掲げてそれに向かって取り組むことで、教育ファームの可能性は無限に広がります。

### 目標のお味噌を目に見える形で

仙台味噌をテーマ食材としてユニークな食農教育を進めている、明成高等学校調理科リエゾンキッチン。これまでに生徒たちが学んできたことをまとめ、さらにそれをより年少の世代に向けて伝えるために、パンフレット型教材『おいしい笑顔のつくり方・リエゾンファーム』を開発しました(カード3-1)。1年間の予定と目標が、「大豆を育ててみよう」「郷土料理をつくろう」「お味噌をつくろう」という流れでストーリー仕立てになってわかりやすく紹介され、タネまきから収穫までポイントを日記のスタイルで記録しながらトライできる内容になっています。6月に近隣の桜ヶ丘小学校と一緒に大豆のタネまきをするとき、そのタネが仙台味噌にたどりつくまでの道のりをこのテキストで確認することで子どもたちの「やる気」が増していきました。

### 初めから目標にしていた「食」がおなかに入った感想は…

仙台市内の親子を主な対象に農業体験を提供している、NPO法人せんだいプチファーム。長ナスと枝豆を定植した5月の時点から、ゴールとする目標ははっきりと決まっていました。「郷土料理の仙台長ナス漬けとずんだ(枝豆をすり鉢ですったぬた)餅をつくろう！」。

8月。「とってくれ～」といわんばかりにたわわに実った枝豆と長ナスを収穫し、み

黒米粉入りずんだ白玉(下)と長ナス漬け



んなで長ナス漬けとずんだ餅を調理して食べました。「ナスと枝豆の植付けからやってきて、ようやく今おなかにおさまって、一連を見てきたなあという安心感があります。ずいぶん手をかけたのに食べるのは一瞬。食べ物のありがたさが体にしみた気がします」。参加者からこんな感想が聞こえてきました(カード3-1)。

### 虹色に輝け！ 田んぼに泳ぐ魚たち

「いつまでも田んぼが虹色に輝くように」という思いで名づけられた、岐阜県の六ノ里・棚田にじいろプロジェクト。「田んぼにでっかい魚が泳いでいる！」となったら、インパクトがあってたくさんの人に足を運んでもらえるんじゃないかとスタッフたちは考えます。じゃあなんの魚がいいかな……そこはやっぱり「溪流王国岐阜県郡上＝長良川」ということで、古代米など紫・白・黄・緑4色の苗をみんなで植えた6月から4カ月あまり、2枚の棚田に、アユとアマゴ2匹の魚が姿を現しました。「田んぼに泳ぐ魚」の期待どおりのインパクトに、地域の人たちも大勢応援にかけつけてにぎやかな声が飛び交います。

「人が来てくれて、そりゃあ嬉しいさ」と語るのは手伝いにやって来た地元のおじいちゃんたち。「外から子どもたちがやって来ておもしろい田んぼができた。新聞やらで紹介され毎週いろんな人が見学に来るようになった。地域を知ってもらえて農業に興味を持ってくれるようになって、いろんな人が六ノ里を応援してくれよる」。

アユとアマゴ2匹の魚の田んぼの絵が、「地域にたくさんの人を」という目標にもつながり、六ノ里の未来はきっと虹色でしょう。



田んぼのアユ 今から食べるよ～

## 2 スタートから魅力をも！ 圃場デザイン・体験目標

### 「目標」は「目標」にとどまらない！

「目標」に取り組むことで次の「目標」が生まれ、時として「目標」以上の体験につながる、それが教育ファームのいいところです。

#### 「どうして？」からはじまった

高知市の横内小学校5年生(横内小学校 農業応援隊)が総合的な学習の時間にこんな疑問を漏らしました。「新潟産のコシヒカリは売れるのに、どうしてうちのおばあちゃんのコシヒカリは買ってもらえないの?」「米として売れないのなら何か他の方法はないの?」……この“何か他の方法”を探ることが目標となり、子どもたちがたどりついたのが新聞記事から見つけた「米粉」でした。さっそく自分たちで育てた米を製粉所で粉にしてもらいパンやお菓子をつくって見たところ、モチモチした食感で実においしく、この米粉パンは学校給食にも登場することになったのです。

その子たちが6年生になって、今度は「自由献立の日」(子どもたちが給食の献立を立てる日)に「米粉ピザ」を考案。お米づくりを指導してくれた農家、ピザを焼いてくれる地元のパン屋さん、ピザの具の野菜を調達した地元JA直売所、献立の栄養バランスやカロリーを教えてくれた栄養士、などなどお世話になった地域の人たちを招待して振る舞いました。

やがて教育委員会から子どもたちに、こんな嬉しい報告が届きます。「今年度中に高知市内のすべての小学校で米粉メニューの給食が実現できそうです!」。

「米として売れないなら何か他の方法はないのか?」。子どもたちが掲げた最初の目標がまた次の目標へと、どんどん広がっていきました。



「米粉パンで〜す!」

#### アイガモが教えてくれたいのちと食～「体験」は「目標」を超える



わが子を思い浮かべて真剣な話し合い

長野県安曇野市のバジルクラブは、地域の親子たちと一緒にアイガモ農法でお米づくりに取り組みました。5月にみんなでアイガモのヒナを田んぼに放したときから、代表の鈴木達也さんの頭には、虫を食べたり草を食べたり活躍してくれるこのアイガモたちを秋にどうしようかという思いがありました。

8月のサマーキャンプの夜、大人たちだけで徹底的に話し合いが行われました。「子どもたちにはしめる現場まで見せなくてもいいのかもしれないけど、温かかった体がだんだん冷たくなっていくところは見てほしい気がする。どこまでが生きているいのちで、どこからが食べ物なのか」「いずれはわかってほしいこと。親の責任として見せたいか見せたくないか」「子どものトラウマになっちゃいそうな気がして、それが心配」……結論として、田んぼのアイガモを肉にする過程を活動として位置づけるけれど参加は自由、特に子どもに体験させるかどうかは親の判断に委ねることに。アイガモの解体をめぐっていのちをテーマに大人たちが真剣に考え導き出した、これがひとつの「目標」になったわけです。

そして10月。いよいよアイガモとお別れの日がやってきました。集まった3人の中学生のうち、しめるのも解体もやってのけたのは1人だけ。小さな子たちの間でも、しめる現場も見なかったという子もいれば、最後まで羽根むしりもできずふれることができない子もいました。ひとりの女の子は、足をばたつかせて息を引きとるアイガモの姿に涙をこぼしました。大人たちも、しめるところから参加した人、解体から参加した人と本当にさまざまでした。

「食とは他の生きもののいのちをいただくこと」。言葉で表される「目標」以上のものが、子どもだけでなく大人たちにも残ったようです(カード4-9、6-4)。



## 目標を掲げ、意気込みを伝えてⅡ 売ろう、アピールしよう

農作業を面倒くさがったり、あきてしまう子もいます。そんなときは「売る！」。収穫物の販売を目標にすることで、子どもたちの意欲も劇的に向上します。

### 「売りたい！」。だから「しっかり育てる！」

愛媛県の日吉小学校3年生は、雑穀栽培で地域おこしに取り組む地元グループ“穀彩村”の指導のもと、アワやキビなどの栽培～収穫～食べるまでの活動をしています(鬼北町日吉地区教育ファーム推進協議会 カード4-6)。今年はさらに、地元直売所の秋祭りでの販売を目標に加えたところ、「売れまくりたい!」「その



がんばった分だけ、収穫の喜びも大きい!

ためにはしっかり育てないと」。子どもたちの間に、そんな雰囲気が出てきました。

晴れの日が近づけば、苗が枯れないようバケツで何杯も畑に水を運び、草取りも積極的に。夏休みには、何度も畑の様子を見に行きました。

がんばりの甲斐あって、アワもキビも豊作! 脱穀して袋詰めし、秋祭りではバッチリ売り切りました。

### 合言葉は「“秀”づくり!」

徳島県の阿波市立伊沢小学校6年生は、地元の特産品である阿波ナスの栽培に取り組み、自分たちで考えたレシピで調理し食べること、そして地元の直売所で販売することを目標にしました。

社会科学習で、JAの選果場へ見学に行った子どもたち。そこで、品質の良いナ

スには“秀”のランクが付き高く売れること、生産者はそのために努力していることを知ります。

それ以後、「“秀”づくり!」が子どもたちの合言葉に。売ることを念頭に置いたからこそ、生産者の努力や品質の話が自分たちの問題意識へと転化したのです。

JAの職員から規格の説明を受ける



### 「売れなかった」ことから新たな学習に発展

夏休みに、阿波ナスを地元直売所で販売した伊沢小学校の子どもたちですが、残念ながらそこではほとんど売れませんでした。なにしろ地元の特産品。わざわざ買わなくても、自分でつくったり近所からもらえるものだったのです。

けれども、子どもたちはへこたれませんでした。どうしたら売れるか、周りの人びとにリサーチを開始し、アイデアを集めてきました。

そのなかに、家のおばあちゃんから「昔は干しナスにして、味を付けて煮て、チラシ寿司の具のひとつにしていた」と教えてもらった子が。「そうか! 干しナスにして、ナスがとれなくなったところに売ればいい!」とひらめいた子どもたち。さっそく干しナスづくりに挑戦し、新しい料理レシピも考えました。そして、11月、地元の

JA祭りで販売し、見事、完売したのです。



新メニュー「干しナス入りギョウザ」

最初に掲げた目標が、「売れない」というハプニングを機に変容し、地域の食文化の知恵という新しい学びへとつながっていく。そんなふう学習が充実していくのが、教育ファームのおもしろさのひとつです(カード4-8)。

### つくって売ろう！ そこから生まれる学び、伝わる気持ち

#### 保育園児がつくった野菜 夕市で大人気



お買上げ  
ありがとうございます  
ございました～

山梨県の西桂保育所(西桂町教育ファーム)では、保育所内で夕市を開催し、年長さんたちが畑でつくった野菜(カード2-3)を販売しています。以前は、子どもたちがただ家に持ち帰るだけでしたが、「活動の終点がひとつの家庭のなかで完結してしまうのはもったいない。子どもたちが畑で一生懸命野菜を育てていることを、より広いつながりのなかで伝えたい」と始まった取り組みです。

お迎えのお母さんたちがやってくると、年長さんたちは「いらっしゃーい」「トウモロコシ、ぼくたちが育てました」「とれたてです」「甘いです」と自信たっぷりにすすめます。年長さんのお母さんはもちろん、年少、年中さんのお母さんも次々と買って来て、園庭にはお母さんたちのおしゃべりの輪が広がっていきました。

#### 街中で「売る」ことのむずかしさと喜びを知る

畑で枝豆の栽培体験をしてきた大阪府八尾市の東果大阪(株)きざぐりプロジェクトチームの子どもたち。さらに、近鉄八尾駅前にある大型ショッピングセンターで枝豆の販売に挑戦します。

おそろいの緑のハッピーを着込み、通りかかるお客さんに販促用のチラシを渡そうとしますが、足早に通り過ぎる様子に圧倒されて言葉も出ません。そこで、作戦変更、数人の子どもは呼びかけに専念します。「いらっしゃい！ 八尾の枝豆どうですか！」。大きな声に活気づく販売ブース。チラシ配りにも熱が入ります。



威勢の良さは大人顔負け

いらっしゃーい！

買い物客も徐々に集まり始め、そしてやっと売れました！「ありがとうございます！」。おいに遊ぶ子どもたち。栽培体験の先に販売体験があることで、子どものなかで「つくる」と「売る」ことがつながり、販売のむずかしさや喜びの実感が倍増します。

#### 模擬セリでプチ流通体験、お金の使い方も

農林漁業は、生産者だけの世界ではありません。経済の流れのなかで、流通から小売まで、多くの人がさまざまな思いを持ってかかわっています。その一端を伝えたいと流通業者が中心となって活動しているのが、東果大阪(株)きざぐりプロジェクトチームです。



気合十分！ 小さなセリ人たち

ここでは、八尾市の小学生を対象に、枝豆の栽培・販売体験のほか、「疑似セリ体験」なども行っています。

親子がペアになり、番号札のついた帽子、セリ値を書くボードが配られて、セリの開始！ 手にするお金は1,000ベジーノ。「ベジタブル(野菜)」に由来する擬似通貨で、1ベジーノが1円相当です。

壇上にズラリと並べられた青果。欲しい商品が出たらボードに値段を書き、もっとも高値を出した人がセリ落とすことができます。残金と残りの青果を見比べながら、「あと400ベジーノ……もっと考えて使わんと」と考え込む子どもの姿は真剣そのもの。

子どもたちは、栽培体験を通して「いいものをつくって高く売りたい」生産者の気持ちを理解します。その一方で、セリ体験では、それを「なるべく安く仕入れたい」小売の立場を知ります。食材流通の仕組みをプチ体験することで、子どもの視野はぐんと広がります。